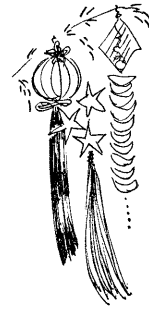


星



周 郷 博

私の少年時代の魂の「夜明け」みたいなものを「支え」守ってくれたものは星だったなア、と半世紀も昔のことを憶い出すことがときどきある。

この間も、新聞に野尻抱影先生のことが出ていて、私は先生の『星座巡礼』という本をあつ十五、六歳のころどんなに心のよき友のようにして読み、大事にいつももって歩いてきたかを、「なつかしい(いとしい)」気持ちで思いだした。それともう一つ、『三つ星の頃』という服部嘉香という人の少年小説が、そのころの私の揺れやすい感傷を醇化してくれた大切な本だった。

この二冊の本に、私はほんとうに深い感謝をささげたい気持ちで、いまこの年になって感じる。

十月、木の葉が次第に散り終った夜空の、澄んだ東の地平

線から昇ってくるオリオンの三つ星、天馬座のアンドロメダやカシオペア、春の日暮れの乙女座のみどり色にまばたくスビカ……野尻抱影先生は、あの星のまばたきに深く見入っていると、自分の胸の鼓動が、海の潮の満ち干(寄せ返すリズム)と似たように、いっしょに「動き出す」という、私には忘れられない文章で書いていた。

それに、もう一冊の本を挙げれば、当時新潮社からでていた小型の『石川啄木歌集』——これも、まえの二冊の本とはちがった意味で、私の少年時代の「導きの星」になった本だった。悲しみの時、失意の感傷のときに、これらの本がどれほど私のこわれやすい心を慰め、力づけ、引きしまりと希望をもち来してくれたか。

私はそのころ、中学(いまの高校)へも行けず、東京電力

(当時は東京電灯)の市川の田んぼの中の変電所に働いていて、その杜宅にすんでいた。故郷の家は貧乏になり、半ば分解家庭に近かった。

私が十六歳のときに関東大震災が起こり、そのあと石井重美という人の『地球の終り』という本が出て、これも、少年の心で深く影響を受け、読みふけて宇宙や地球や、そうして生きていることの神秘に私の魂の扉をひらいてくれた本だった。……天変地異、人間の生命のはかなさ——そういう地球に生まれた私が仰ぐ天空の夜空のあの広大無辺な宇宙の星空、星座(コンステレーション)の美しくまばたく、ほとんど永遠の姿。「さびしさのきわみにたえて天地に寄するいのちをつくづくと思ふ」と歌った伊藤左千夫という歌人は、その市川の江戸川の上流、松戸の近くに住んでいた人だった。

☆

私はいま、星のことを書こうとして、自分の十五、六歳の少年時代を思いだして、いまさらのように深い感慨^{II}思いにひたっている。天変地異——それに「人為的な地異」である公害汚染と自然破壊、さらに核兵器のおそろしい貯蔵量と人間の心の荒廃——生きることはかなさ。これらは、私の少

年時代とはちがった意味で、それよりもっと大きなスケールで私たち人類をつつみこみ日々「侵蝕」しているのに、「それが見えないで」ただ目前の「蝸牛角上の争い」、物質的享楽に溺れている私たちは、もう地平線も見えず夜空の星も仰がない。あまりにあまりに「この世的」になっていないか。古代ギリシャそのほかの「地下牢」は、太陽も、星も遮断された「海の下の地下の牢獄」だった。現代人の日常生活はその牢獄とどこか似ている。そこに教育という「神に近づく精神の伸長」があるか。そんなところに、開かれた健康な人間関係、「愛という花」は咲くか。生まれた子どもが人間に生まれた神秘をどうしてあらわせるか。

☆

戦後——日本の社会が次第に「変わって」ただ騒がしく「どこへ行くか」もわからず迷っていたとき、私は、もういちど星^{II}「導きの星」にいつしらず心の触角をうごかすことになった。戦争が終って十二年目のことだった——一九五七年(この年に、ソ連がスプートニク打上げに成功して、アメリカの「教育」は混乱に陥る)の八月の始め、私は四国の松山へ講演に呼ばれていって、その晩の夜の八時ごろ、松山城

の城廓の林の道で、私は偶然にも（幸福にも）北の空、三十度ぐらゐのところに、あのずつと夢に描いた、「尾を引いた」^{オウビ}彗星をこの肉眼で「見つけた」のである。私はただただ「興奮して」うす暗い道で通りすがった若者——それに女子中学生に「見てごらん、彗星だよ」と指差して知らせるのに、だれも私の驚きと驚きを分かとうという心を知ってくれず、「そんなの学校で習ったワ」といって通り過ぎて行ってしまひ……私は宿へ帰って、物干台に出て、一晩夜の星空を眺め入って淨らかな瞑想に時をすごした。忘れない浄められた時間。

あのハレー彗星があらわれたのは一九一〇年、私がやっと三歳になったときだった。自分の記憶はほんやりして殆んどなく、ただ母がその午後、彗星のひらいた尾の中へはいって、太陽が暗くなり、昼間なのに「星がぞろぞろと光りだし」やがて夕方の西の地平線に去っていったハレー彗星（ほうき星）の話をよくしてくれた。「母親の経験とことばの支えが、幼少時の経験と心の〈成長〉を一つになって支えている」のだろう。太陽系宇宙の迷い子のようなそのハレー彗星は、七十六年の周期で、九年後の一九八六年に地球の近くへもどってくる。私は、生まれたときから星と縁があった——。

その一九五七年からしばらくして六〇年代の始め、私はテイヤール・ド・シャルダンとの驚くべき（幸運な）「出会い」をした。一人の人間がこの地球に生まれてその意味を完成するのは「詩||叙事詩」のようなものだ、ということに彼の「進化」の中では位置づけられる。その通りだ！と私はこのごろ納得させられている。物知り競争、権力や金力の争いのみじめさ！

幼児がその人間になっていく過程も「星はあがっているが、濃い霧がかかかっていてそれを覆いかくしている」のだという。時間をかけて、見直されるべきで、「人造の星」にしてしまえば、それは金白糖で、キツネか誰かに食べられてしまうだけのものになる。自然の恵みのような「霧||肉体や感覚（の成長）」でなく、その代りにスモッグや精神汚染という濁った濃い霧をどう浄化すべきかを、ほんとうにまじめに考えたい。このブルー・ガイヤ（宇宙に浮かんでいる、この生命の繁茂した、かけがえない星）地球と地球の子 earthling（人間）の未来のために！である。